

金木犀のはにかみよ

一

一昨日、左隣の部屋に誰かが越してきた。ちらっと見た業者さんたちの作業は中々慌ただしかったが、半日もしないうちにピタリと静かになって、よっぽど物が少ない一人暮らしの人が越してきたのかな、と思った。

「椎奈、時間いいの？」

「もう行く。お父さんどいて」

洗面所でコンタクトレンズを目に押し付けていた父にそう言って鏡の前に立つと、軽く前髪を整える。私は右、左の順で鏡に髪の毛を見せて、まあいいかと洗面所を出た。私が洗面所から出てくるのを待ち構えていた母が、まるで、なにかに困っています、とでも言いたげに頬に手を当てながら言う。

「ねえ、左のお隣さんには会ったことないわよね」

「ないけど」

ほとんど生返事だ。母はそうよねえと言って腕を組むと、玄関でローファアの踵をグイッと引っ張る私に、さも自分たちは被害者かのように言った。

「お隣さんね、一昨日引っ越してきたでしょ。ご挨拶に見えないのよね」

「へえー……。来たばかりだし忙しいんじゃない」

「そうよねえ。でもちょっと、ねえ。椎奈も気をつけてね。ああそうだ、進路のこともちゃんと」

「行ってきます」

一体なにに気をつけろと言うのだろう。別に今どき、人間関係が昔よりも希薄な世の中で、ご近所付き合いなんて必要ないという人は山ほどいる。母のような面倒おばさん避けることができる、とても賢い選択だと思う。

「……あ」

「あ、どうも……」

玄関を閉めてエレベーターの方に身体を動かしたとき、目の前に見慣れない男の子がいた。彼も今部屋から出できたようで、鍵が回る音がする。どうやら件のお隣さんのようだ。こんなに早く出会うとは思っていなくて、少し動揺する。勝手に一人暮らしのサラリーマンとか、OLだとばかり思っていたが、パッと見の顔^谷奥きは^ゆ同じ年くらいの人だった。

「あの」

「は、はい」

「……雀ヶ丘第二の制服……スよね」

敬語に慣れていないのか、人見知りをしているのか、どこかたどたどしく聞いてくる。私は頷くと、同じ高校の制服を身にまとった彼をまじまじと見つめた。

「えっと……」

「あ、すみません。同じ学校の人がいると思ってなくて」

照れ笑いしてそういう彼は、母が言うような『ちよっと、ねえ』な人には見えない。彼は遠慮がちなまま、私の機嫌を伺うような目をしながら口を開いた。

「高校まで一緒に行ってもええたりしませんか」

「あ、はい、それは全然……」

道案内ならしてあげてもいい。と、言うより、この状況で置いて行く方が難しい。私たちは一緒にエレベーターに乗り込んで、沈黙の空間を作り出した。

「……」

「俺」

先に口を開いたのは彼だった。彼は私を注意深く観察しながら、どうにか私が少しも嫌な思いをしないよう、気遣っているような声色でようやく基本の情報を教えてくれた。

「一昨日越してきた、檜山茜です。三年です」

「あ……えっと、穂波椎奈です。私も三年生」

よろしくと言って、感じの悪い印象にならないよう少しだけ笑うと、檜山くんは嬉しそうに笑い返してくれた。檜山くんはやや田舎なこの辺りでは少し珍しい、黒髪センターパートで、今どきのアイドルみたいな見た目をしている。

「檜山くんは、どうして引っ越してきたの？」

エレベーターがエントランス階に着く。私と檜山くんはエレベーターを降りると、自動扉を抜けた。マンションのエントランス部分に植えられた、金木犀の香りが強く香ってくる。私はそれに少し顔を顰めた。

「妹がいるんだけど……あんまり外に出られなくてさ。それで、病気の療養のためっていうか」

「そっか、この辺大きい病院もあるもんね」

「そうそう」

家庭に身体の弱い子がいたら、たしかに隣人に挨拶なんてしている場合ではないだろう。ご両親が付きつきりになっているかもしれないのだから。しかし、まだ檜山くんのことをなにも知らない私がなにを言ったところで無責任な気がして、私は曖昧で無難な言葉を選んだ。

「三年生で転校って、忙しかったよね。お疲れ様」

「まあ……俺の方が兄ちゃんだしさ。多少はしょうがないよ」

「そっか」

一瞬、少しだけ色素が薄い檜山くんの瞳が諦めたように伏せられる。しかし檜山くんはすぐに明るく笑って話題を変えた。

「穂波はなんか部活とかやってる？」

「ううん、前までは書道部だったけど、もう引退したよ」

「あー、そっか。もう引退する時期だもんなあ」

檜山くんは、マンションの前を通り越しても街路樹の中に紛れて植えられている金木犀をちらりと見ると、苦笑いをした。

「この辺って結構金木犀多い？」

「多いかも。学校の近くはそうでもないけど、マンションの近くは多いよ」

「へえー」

ちらちらと金木犀に視線をやり続ける檜山くんは、金木犀が好きだからそうしている、というわけではなさそうだった。私は地面に落ちた橙色の星のような形をした金木犀を見てから、檜山くんに聞いた。

「金木犀、苦手？」

「……ちよっとだけな」

「私も、金木犀の匂いちよっと苦手なんだ。ガス漏れしてるみたいで」

「分かる！」

パツと檜山くんの顔が明るくなる。檜山くんは無邪気な子犬のような笑顔で私を見下ろした。

「この時期ってさあ、金木犀の匂いのシャンプーとか香水増えるだろ？ 俺、嗅ぐ度にガス漏れの匂いだって、いつも身構えちゃうんだよなあ」

「あははっ、分かるよ！ 他にそんなこと言ってる人いないから、私だけかと思ってた」
「思いもよらないところで共通点を見つけて、私と檜山くんはその後金木犀の悪口を言った。虫が寄ってくるだとか、とにかく臭いだとか、大量に落ちる花が嫌だとか。ケラケラと笑う檜山くんは、同じ年の男の子と言うより、やっぱり無邪気な子犬のようだった。」

「あ、そうだ。穂波、職員室ってどこ？」

「本題忘れてたの？」

「うん。金木犀アンチ同盟がいると思ってなくてつい」

学校について靴を履き替えるなり、ニヤツと楽しそうに笑って檜山くんがそう言う。朝の下駄箱に現れた見慣れない男の子に、周囲の視線は釘付けだった。

「一緒に来てくれよ」

「いいけど……」

よっしゃ、と言って檜山くんが私の隣に並ぶ。私は流れるように集まってきた視線にどこか居心地の悪さを感じながら、それを全く気にしていない体を装って、檜山くんを職員室まで連れていった。

「ここだよ。クラスとかもう分かっているの？」

「一応、七組って言われた」

「あ、じゃあ同じだね。ほら、あの一番組奥の、黒いジャージ着てる先生が担任だよ」

私が指さして担任を教えてあげると、檜山くんは頷いて一言、ありがとうと言うと中に入ってしまった。私はもう役目も終えただろうから、一人で教室に向かう。先程まで檜山くんやついでに私に注目していた生徒たちはとっくにいなくて、私は誰から注目されることもなく、のんびりと歩いた。

「おはよう、椎奈！」

「凜、おはよう」

友人の凜が明るく笑いながら挨拶をしてくる。凜はまだ登校してきていない私の前席の子の椅子を借りて座ると、コロコロとよく変わる表情で今朝の出来事を放出しはじめた。

「それでさあ、お兄ちゃんの彼女？　みたいな人？　がフツーに洗面所使ってたの！　まじで有り得くない？　あたしほんつとびっくりして！」

「凜の家っていつも濃いね」

「お兄ちゃんとお母さんのせいだよ！　あたしとお父さんはマトモだもん」

「そういえば、お父さんとお母さん、帰ってきたの？」

「ううん、次はこのままフランスだって。ほんと忙しいよね」

凜の話に頷きながら、ふと檜山くんのことを思い出す。うちの担任……安藤先生は適当だから、ちゃんと教室まで一緒に来てくれるだろうか。凜は一瞬思考を飛ばした私をじつと見つめると、ねえ、と遠慮がちに珍しく小さな声を出した。

「あのさ、椎奈。……椎奈って、その、彼氏できたの？」

「へっ」

思いもよらない質問に、間抜けな声が出る。凜は視線をウロウロさせながら、少し寂しそうに言った。

「さっき、知らない男の子といたの見てね。あれ、あたし彼氏できたとか好きな人いるとか、聞いてないなーって……。あつてもイケメンだったし、椎奈とも仲良さそうで、お似合いだなって思ってた……」

「……」

絶対に檜山くんのことだ。私は誤解を解くために、言葉を選ぼうとした。

「誰が彼氏？」

「うわっ」

背後から声をかけられて、肩が思い切り跳ねる。凜は私の背後にいる声の主を見上げると、気まずそうに立ち上がった。

「あつすんません、びっくりさせるつもりは」

そう言っただけで私の横に立ったのは、やっぱり檜山くんだった。檜山くんは私と凜を見比べながら、私と、それから凜が嫌な思いをしないよう、エレベーターのときと同じく伺うような声色で言った。

「俺、檜山茜です。最近引っ越してきて、穂波とは偶然マンションが同じでさ。ここまで連れてきてもらったんだ。ただそれだけで、彼氏とかではないです、全然」

「そうだよ、凜。友達かも怪しいから」

「友達にはなっただろ!？」

私の雑な冗談に、檜山くんが百パーセントの反応を返してくれる。黙っていた凜も、それによりやく笑った。

「よかったあ、あたし信用されてないのになって思ってた……」

「そんなわけないじゃん」

凜の誤解が解けてほっとする。凜は椅子に座り直すと、檜山くんにも人懐っこい笑顔を向けた。

「檜山って席どこ？」

「窓際が一番後ろって言われた」

「うわー、転校生って感じの席だね」

「目立つちゃうよなあ」

二人とも明るくて柔らかな性格だからなのか、テンポよく会話が進んでいく。檜山くんは越してきたばかりとはいえ、私は私の友達同士が仲良くなっていくのが嬉しくて、二人の会話を聞きながら、たまに相槌を打ったりした。

「檜山、なんで引越してきたの？」

「親の仕事の都合でさ。変な時期だけど」

あれ、と思った。妹さんの療養のためじゃなかったの、と言いかけて、私はすぐに口を閉ざした。檜山くんがわざわざ嘘をついた理由が分からなかったし、もしも妹さんのためだったとしたら、お兄ちゃんの優しさを壊してしまうと思ったからだ。

檜山くんが教室に馴染むのに、時間はかからなかった。安藤先生が檜山くんを雑に紹介したホームルームが終わるなり、男の子たちが檜山くんを囲んだ。檜山くんも人間関係が上手いタイプなのか、あっという間にクラスメイトたちの名前を覚えて、元々うちのクラスにいたかのように溶け込んだ。

「すごいね、檜山くんって」

「なにが？」

帰り道、金木犀の香りが濃くなってきた道を歩きながらそうこぼした私に、檜山くんが不思議そうな顔をする。私は檜山くんがやって来た日から今日まで、たった一週間の様子を思い出した。

「みんなとすぐ仲良くなったじゃん」

「そうか？」

体育の授業のあと、男の子たちが檜山くんは脚が速いとはしゃいでいた。受験期に入っ
て大抵の部活も三年生は引退したあとで、檜山くんがもつと早く転校してきていれば、も
っと大会で勝てたかもしれないと陸上部の元キャプテンが嘆いていたのを見た。

「檜山くんってなんでもできるんだね」

「そんなことないけどな」

勉強だって、やって来てすぐのテストで上位に入っていた。受験期だから常に勉強しているとはいえ、檜山くんはまるで超人のように思えた。運動も、勉強も、人間関係も。親しみやすさや気安さがある中で、私はどこかで、初めて出会った日よりほんの少しだけ、本当に少しだけ距離が生まれたような気がしていた。

「俺からしたら、穂波の方がすごいけどな。すごい気を遣ってくれてさ、それも押しつけがましくないっていうか」

「いや……私は全然……」

「謙遜しちゃってー」

檜山くんがふざけて笑う。檜山くんは風に吹かれて目の前に集団で転がってきた金木犀の花を踏むと、自分のローファアの爪先を見つめたまま言った。

「あのさ、明日うち来ないか？ 土曜日だし……」

「え？」

檜山くんが目線だけを私に向ける。まるで探っているような目線だった。檜山くんの声は気遣うような声色ではなくて、ただ淡々としていた。

「……妹に、会ってほしいんだ」

「妹さんに？」

檜山くんが頷く。私はてっきり、妹さんは病院にいとばかり思っていたが、どうやら自宅にいららしい。

「妹がさ、穂波に会いたがってたんだ。穂波が親切にしてくれたこととか、色々話したら……ちよつと、気になったみたいでさ」

「私はいいけど……、大丈夫なの？」

「うん。移るようなもんじゃないし」

檜山くんの声に、いつものような無邪気さや柔らかさはない。どことなく薄暗い、期待など最初からしていないかのような、諦めたような雰囲気だけがあつた。

「あ、いや……、その、妹さんとか親とか……。都合的な」

「ああ！ それなら全然平気。親はどうせ仕事でいないし、妹がすぐにでもって言うてるからさ」

檜山家の心配をしたつもりだったが、私が乗り気ではない、と受け取られてしまっていたらしい。私の月並みな弁解に、檜山くんはすぐに笑顔を浮かべた。いつもの人懐っこい子犬のような笑顔を。

「そっか、じゃあ明日行こうかな」

「分かった！ ありがとな」

「ううん」

マンションの自動扉を通りながら、明日の予定を軽く立てる。集まるのは十二時、お昼と一緒に食べる。そのあと、ちよつと勉強会。十六時頃解散。

「じゃ、また明日」

「うん、明日」

檜山くんと私はほぼ同時に部屋に入る。私がローファーを脱いで顔を上げると、母が立っていた。

「ただいま」

「おかえり、椎奈。ねえ、お隣さんのご両親って……」

「まだ言ってるの？ 私も会ってないって」

母は未だお隣さん、というか檜山くんのご両親に会ったことがないらしく、私が檜山くんと会った日からしつこく聞いてくる。私はいい加減うんざりしてきていて、少しぶっきらぼうな口調になった。

「お仕事で忙しいんだって。妹さん身体弱みたいだし、大変なんだよ」

「ええー。だったらなおさら、ねえ。ご近所付き合っておかないと、娘さんになにかあったとき」

「なにかあったってなにもできないでしょ。お医者さんじゃないんだし」

「そうだけど……」

つまるところ、母はあの一家の悪口を言いたいただけなのだ。檜山くんたちのことをなにも知らないのに、毎日のように話のネタにできることに驚く。私はまだ、世間一般で言うところの反抗期を抜け出していないらしく、母は私の苛立った態度にため息をついた。

「私、明日出かけるから」

「受験期に？ どこ行くの？ ねえ椎奈、木崎大学って偏差値高いじゃない、遊んでる暇は」

「友達の家で勉強会。私木崎大じゃなくて茅ヶ崎大行くって言ってんじゃない」

檜山くんは友達だし、お昼ごはんのあとは勉強会をする。特に嘘はついていないけど、妹さんに会うなんて言ったら、また『ちょっと、ねえ』攻撃が始まるだろう。それに、志望大学を勝手に脳内変換されているうちは母と話したくなかった。私はそれ以上何も言わずに、黙って部屋に戻った。

翌日、私は少し早く家を出て、近所にある小さなケーキ屋さんでスノーボールクッキーとメレンゲクッキーを味違いでいくつ買った。今日は昨日より少し気温が下がって、ようやく秋がきたと言える気候だった。風に乗って漂う金木犀の香りがなければ、深く息を吸って歩きたい。マンションに戻れば戻るほど濃くなる金木犀の香りは、やっぱりガス漏れみたいで嫌だった。

「穂波！」

エレベーターから降りると、わざわざ部屋から出てきて待っていてくれた檜山くんが私を見つける。私はやや駆け足で檜山くんに近づくと、おはようと言った。

「おはよ。どっか行ってた？」

「うん、ちょっとね。待たせてごめん」

「いや、まだちょっと時間より早いくらいだし。むしろ待たせなくてよかった」

檜山くんが玄関を開けながらそう言う。本当に聖人のような人だ。私は檜山くんが続いて中に入ると、靴を脱いだ。

「……お邪魔します」

少し緊張気味になったのは、初めて入るからだけじゃない。なんだか無機質で、家族で暮らしているはずなのに、あまりにも生活感が薄かったからだ。

「どーぞ」

笑顔の檜山くんが浮いて見えるほど、モデルルームのような部屋には人気がない。

「……あ、そうだこれ」

「え、わざわざよかったのに！　ありがとうな」

「ううん。洗面所借りていい？」

「おー。多分間取り同じだよ」

私は言われるままに、自宅の洗面所がある場所と同じ場所の扉を開く。そこには洗面所があるわけだが、我が家の洗面所よりもずっと静かで、生活の息吹を全く感じない。客人が来るから家を片付けた、というか、初めから人が住んでいないと言われた方がしっくりくる。ハンドソープやうがい用のコップ、檜山くんが使っていると思しきワックスが真っ直ぐ、大中小の順で規則正しく並んでいる。そしてなにより、置いてあるタンスも洗濯機も、つけられた照明もタオルもほとんど新品のようで、妙に生白かった。あまり水を飛ばさないように手を洗ってうがいをして、もう一度洗面所を見渡す。やっぱりなんだか緊張した。

「ありがとう」

洗面所から出て、檜山くんと合流する。檜山くんはリビングの扉を開けると、右奥の扉を指さした。

「あそこ、妹の部屋」

「入って大丈夫？」

「うん。自分からじゃ出てこないと思うから」

よっぽど人見知りなのか、動けないのか。私はゆっくり扉に近づいて、ノックをした。

「はは、普通に入っていいよ。俺はこっちにいるから、二人でちょっと話してて」

後ろにいた檜山くんがそう言って笑う。私は頷いて、慎重に扉を開けた。

「お邪魔しま、」

涼やかな風が吹き込んで、金木犀の香りが薄く漂う。私が言葉を途中で切らしてしまったのは、金木犀の香りがしたからではなく、ベッドの縁に座っているのがパジャマを着た同じ年くらいの女の子だったから。妹と言うからってつきり、もっと小さな子なのだと思っていた。

「……穂波、さん？　どうぞ、入って。閉めてもらっていい？」

「あっ、は、はい！」

女の子は少し猫背気味に座ったまま、じっと私を見つめている。私は部屋に入ると、静

かに扉を閉めた。

「えっと……、ほ、穂波、椎奈です。檜山くんの友達の……」

「うん、茜くんから聞いてる」

彼女の部屋は物が少ないが、どこことなく生活感がある。ベッドに置かれた少しくたびれたぬいぐるみ、毛が逆立った白いカーペット、水色のカーテン、机に積まれた参考書。この部屋だけが、檜山くんの家の中から切り取られた空間のように感じた。

「えっと、……」

「わたしね、葵。双子だから、穂波さんと同じ年」

「そう、なんだ……」

「うん。だから、葵でいいよ」

葵の声は、どこか頼りない。弱々しいと言うべきか、華奢な身体にあった少しか細い声だった。

「じゃあ……私のことも、椎奈で大丈夫だよ」

「嬉しい」

葵がにこつと笑う。葵は手招きすると、私をベッドの上に座らせた。

「わたしが外に出ない理由、茜くんから聞いた？」

「ううん、なにも」

「そっか……」

葵がどこか安心したように頷く。胸元で握られていた葵の手は少し震えているように見えた。

「あの、言いたくないことなら言わなくていいよ。私、今日葵と友達になるために来たし」

檜山くんが私を連れてきたのは、ただ妹のワガママを叶えるためだけじゃないはずだ。きつと、私と葵が友達同士になればいいと思ったから、だから私と葵を二人にしたのだ。

「ありがとう」

葵がほつとしたように息を吐く。私は固く握りこまれた葵の手を、そつとほどいた。葵の肌は白くて、爪の痕が赤く残っていた。

「友達になって、……葵が話したくなったら、少しずつ話して」

きつと、檜山くんが言っていた病気の療養のために、というのも嘘だ。そして葵は、わざわざ来た私に事情を話すべきだと思ってくれたのだろう。その健気な葵の純粋さが、私を葵に寄り添わせた。

「大丈夫だよ、まだ会ったばかりだし。これから話せばいいよ」

「……うん。椎奈は優しいね。茜くんが言ってたとおり」

檜山くんは家で私を過大評価しているらしい。私が苦笑いしたとき、葵の指が私の指に触れた。

「葵？」

葵の透き通った黒い瞳が、私をじっと見つめている。なんだか吸い込まれそうで、目が回るような心地がした。

「椎奈のこと、もっと知りたい。わたし、友達いないから」

「あ、葵」

「なあに」

葵が持つ、飲み込まれそうになる不思議な魅力に、視界がぐるりと一周したような感覚に陥る。檜山くんの双子なだけあって、葵も綺麗な顔をしていた。

「近いよ……」

「あれ、ごめんね。距離感分かんないな」

「お、覚えて」

「じゃあ教えて？」

クスクスと楽しそうに葵が笑う。葵は静かに指を離すと立ち上がった。

「そろそろお昼かな」

「あっうん、多分……」

療養中ということになっている葵を支えようと私も慌てて立ち上がったとき、ノックのあとに扉が開いて檜山くんが顔を出した。

「二人とも、昼できたけど……」

「ありがとう、茜くん」

「えっ、ありがとう」

私と葵は部屋を出ると、綺麗に並べられたお皿の前にそれぞれ、檜山くんと葵、二人の正面に私、というふうに並んで座った。

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます。……檜山くんって、料理もできるんだね」

「料理も、って。穂波はほんとーに俺のこと過大評価してるよなあ」

照れたように笑って檜山くんがそう言う。葵はにこりと微笑みを浮かべて、檜山くん作の Pasta をひと口食べてから言った。

「茜くんね、昔からなんでもできるの。いつもわたしのことを助けてくれて」

「葵まで！ お前、そんなこと今まで言ったことないだらう」

「うふふ」

仲がいらしい二人は、そっくりだけど少し違う、無邪気な笑顔とうっとりとした笑顔を見せた。

「双子ってなんかいいね」

「そう？」

「そうかな？」

同じタイミングで同じことを言う二人に笑ってしまう。なんだかとても微笑ましい。

「私一人っ子なんだよね。だから、親どっちもない日とか寂しかったしつまんなかったんだ」

「わたしたちも、休日に特別話したりしないよ？」

「ご飯だけ一緒って感じだよな」

「それが羨ましいんだよー」

二人が同じ方向に首を傾げる。葵の瞳より少し色素が薄い瞳で、檜山くんが私を見つめた。

「このあとの勉強会、葵も一緒にいいか？」

「もちろんだよ」

「いいの？ わたし、学校行ってないから邪魔になると思うけど」

「ううん、一緒にやろう」

葵の部屋には、何冊も参考書があった。きっと、学校に行けずともあの部屋で一人勉強をしているのだろう。

「じゃあ……甘えちゃおうかな」

檜山くんの髪より少し色素が薄い髪を揺らして、葵がゆったりと微笑む。まるで人形のように、その姿は絵になった。

檜山くんと葵と私が勉強会を始めると、瞬く間に部屋は静寂に包まれた。先程まで喋りながら昼食を食べていた空間とは思えない。まるで私まで、この無機質な部屋の一部に取り込まれているような気がした。

「……」

檜山くんのノートは一冊の終わりがけで、横に新しいノートが積まれている。黙っていると檜山くんと葵はよく似ていて、時折檜山くんが葵で、葵が檜山くんかのように錯覚した。

「一旦休憩にするか」

「うん」

檜山くんの声でシャーペンを置く。檜山くんは立ち上がってキッチンに入ると、私がつてきた手土産を持って戻ってきた。

「葵、飲み物」

「うん。椎奈なにがいい？ コーヒー、カフェオレ、紅茶、オレンジジュース」

「じゃあ、カフェオレで。ありがとう」

葵が慣れたようにマグカップを二つ用意する。マグカップが取り出された食器棚に並ぶ皿は、厳しく統率を取られているようで、怖いくらい等間隔に置かれている。葵は一つだけ、中身が見えない別の棚からマグカップを出して、電気ケトルに水を注いでセットした。

「なんか分かんないところあった？」

「あ、そうだ。英語の文法聞きたくて」

「じゃあ、休憩終わったらやるか。穂波ってどこ志望？」

「一応茅ヶ崎大。教育学部行きたくて」

檜山くんの視線が、茅ヶ崎大の赤本に向く。檜山くんは優しく笑って、穂波なら大丈夫だろうと言った。そのときちょうどカチ、と音がして、お湯が沸くのを待っていた葵がキッチンで動き出す。葵は私と檜山くんの分のマグカップを先に持ってくると、すぐに自分のを取りに戻った。

「ありがとう」

「ありがとな」

「ううん」

葵も席に座って、私が持ってきたお菓子を見つめた。

「美味しそう」

「だよな。これ、どこのやつ？」

「横断歩道渡って右に歩いてくと、小さいケーキ屋さんあるんだけど、そのやつ」

外に出ない葵はともかく、越してきたばかりの檜山くんはまだ知らなかったらしい。檜山くんはスノーボールクッキーを一つ手に取ると、一口でぱくりと頬張った。

「んまい」

「これも美味しい」

葵がメレンゲクッキーを少しずつ口にしながらそう言って微笑む。対照的な食べ方をする二人が少し面白かった。

「今度買いに行こっかな」

「水曜日は定休日だよ」

「うわ、気をつける」

檜山くんが笑う度、葵もつられたように笑顔を浮かべる。私もメレンゲクッキーを口に運んで、葵の笑顔を見つめた。

予定通り十六時まで勉強会をして、私は檜山くんの家の玄関に立った。葵も見送りに来てくれて、檜山くんはそれに少し驚いたような顔をしていた。

「それじゃあ、お邪魔しました」

「急だったのありがとな」

「ううん。こちらこそ、お昼ごはんまでありがとう」

玄関の扉に手をかけながらそう言う。私が扉を少しだけ開けたとき、葵が口を開いた。

「また来て。また会いたい」

「うん、私も」

葵に面と向かって会いたいと言われると、なんだかドキドキしてくる。あまり友達に、こうも真っ直ぐ会いたいと言われることがないから、少し気恥しかった。

「じゃあ……、また月曜日ね」

「おー。またな」

どこか名残惜しいような気持ちで、檜山家を出る。そのまま、数歩の距離にある自宅に入ると、母のパート用の靴がまだないことにほっとしながら自室へと戻った。

「あ」

今日のお礼を伝えるために、檜山くんに連絡しようとして気がつく。私は檜山くんの連絡先も、葵の連絡先も知らなかった。

「……うーん」

月曜日に檜山くんに聞こう。私は先程檜山くんに教えてもらった箇所を忘れないように、勉強机に参考書とノートを広げた。

いつものように金木犀の香りに顔を顰めながら檜山くんと高校までの道を歩く。私は忘れかけていた連絡先のことを、赤色になった信号を見つめているときに不意に思い出した。

「あっそうだ、連絡先。檜山くんと葵の連絡先教えて」

「ん？ あ、教えてなかったな、そう言えば。俺も聞くタイミング逃してそのままになってた」

檜山くんがそう言いながらスマホをポケットから出す。私は檜山くんと、檜山くんを経由して葵の連絡先を手に入れた。

「葵、喜んでたよ。穂波のことすげー好きっぽい」

そう言った檜山くんは、笑っているのにどこか物寂しそうに見える。私がそれに気がついたとき、檜山くんはいつもの笑顔に戻っていた。

「うち、どうせ親仕事でほとんどいないし、穂波がよかったらまた来てやってよ」

「うん、ありがとう」

檜山くんは歩道に転がった金木犀を踏むと、少し嫌そうに眉をぎゅっと寄せた。

「なんか最近匂い強くな？」

「いよいよって感じだよな。匂ってやつ？」

「嫌だなー。常にガス漏れだな」

「あははっ、毎日大変になるね」

学校に近くなればなるほど、匂いは薄くなっていく。私と檜山くんは歩きながら、今日の小テストの話をした。檜山くんは歩きながら計算の説明をしてくれて、私はそれに頷きながら、檜山くんの言葉を必死に頭に詰め込んだ。

「葵と同じとこで引っかけてるな」

「葵と？」

「うん」

土曜日の様子から、檜山くんが葵に勉強を教えてあげている姿が容易に浮かび上がる。葵は高校に通っていない分、檜山くんから吸収しているようだった。

「今日の小テスト、点取れるといいな」

「うん、頑張るよ」

檜山くんの言葉はいつも柔らかい。相手を不用意に傷つけないように、一つ一つ言葉を選び取って話しているのだろう。

「二人ともおはよ！」

「凜。おはよう」

「おー、おはよう。秋田は朝から元気だな」

駅から歩いてきた人たちとの合流地点で、凜が後ろから声をかけてくる。凜はニコニコと笑いながら、私の横にすっと並んだ。

「今回の小テ、自信ありけり」

「数学苦手だったよね？」

「ふふん、まあ見てなよね。今回はろろんに見てもらったんだから」

「ろろん？」

聞き慣れない名前に首を傾げる。凜は頷くと、ろろんさんについて教えてくれた。

「この前言った、洗面所使ってたお兄ちゃんの彼女！ ミロクさんって言うんだけど、話してみたらめっちゃいい人でさー、仲良くなったからろろんって呼んでる！ 頭いい大
学出てる人だったからカテキョしてもらったんだ」

「兄ちゃんの彼女に……。秋田ってコミュ力高いよな」

「そーかなあ？」

「そうだろうー」

檜山くんがそう言って笑う。凜は楽しそうにそのままミロクさんについて話を続けた。

「ろろんはねー、車持ってるから今日迎えに来てくれるんだって！ 仕事はIT系らしいよ、すごくない!? IT系ってなんかカッコイイし」

「凜って、どんな職業でもカッコイイって言うじゃん」

「えー、だってまだ働いたことないんだもん」

凜の前向きで明るいところがたまに羨ましくなる。私は日曜日に母と進路のことで揉めたばかりだった。

「はは、いい人そうでよかったな。仲良くできるならそれが一番だし」

「だよねー、ろろんのためにあたし、今日の小テ絶対八割狙う」

珍しく凜がやる気になっている。いつもは、テストも進路もなるようになれと言いつつだけで補習常連なのに。とはいえ、私も檜山くんに教えてもらった手前下手な結果は残せない。それに、私が希望する大学に行くためには小テストですら真面目に取り組まないと
いけない。

「椎奈顔こわ」

「気合い入れてた」

「独特な気合いの入れ方だな……」

私たちは三人で喋りながら、正門を通過して下駄箱で靴を履き替える。そのまま教室まで

真っ直ぐ向かうと、私たちはそれぞれの席で小テストに備えることにした。

「……あれ」

あと少しで先生が教室に入ってくるというタイミングで、スマホがメッセージを受信する。メッセージを開くと、葵から一言、おはようとメッセージが入っていた。私はそれに、おはようと返して、檜山くんから連絡先を教えてもらった趣旨を送った。

「……」

葵は私と連絡が取れるようになったことを喜んでくれていて、私もそれが素直に嬉しかった。葵からのメッセージは控えめで、私のホームルームがそろそろ始まるだろうからと、一度メッセージのやり取りはそこで終了した。

「はい、おはようございます。ホームルームを始めるから黙るよーに」

いつもの黒いジャージに、ところどころ寝癖がついた頭で安藤先生が教室に入ってくる。眠そうな目で最低限の連絡事項を告げると、次が自分の担当科目である数学なことをいいことに、即小テスト用紙を配り始めた。この時間の最後に返却するから、と言ってから、安藤先生はタイマーを押した。

「見て！ 八割超えてる！」

テストが返却されて、終礼の挨拶をするなり、凜が嬉しそうにやってくる。凜のテスト用紙には目標通り八割超えの85と点数が書かれていて、私は、すごいちゃんと凜のやる気と得意げな顔を損なわないように、小さい子するように頭を撫でまわしながら褒めた。

「ろろろんに報告しよつと」

スカートのポケットからスマホを出して、テストの写真を撮る。私が笑うと凜はスマホを私に差し出した。

「撮って撮って！」

「はいはい」

テスト用紙を持ってピースしている笑顔の凜を写真に収める。スマホを凜に返すと、私も改めてテストを広げた。

「穂波」

「檜山くん」

「どうだった？」

「できたよ。前より上がってるし、檜山くんが教えてくれたところ出たね」

私のテストを見せると、凜が負けたと悔しそうに言う。檜山くんは私のテストを見て、少し安心したように笑った。

「全然違うこと教えてたらどうしようかと思ってたから、よかったよ」

「檜山くんに限ってそんなことないよ」

「いやいや、あるかもだろ」

「あたしも檜山に教えてもらおうかなー、檜山とろろんに教えてもらったら満点取れそ

う」

凜の言葉に確かにと笑う。ミロクさんのおかげで赤点常習犯の凜が八割超えの点数を取れるなら、そこに檜山くんが加わればもはや怖いものなしなのではないだろうか。

「俺もギリだし必死だよ、毎回」

「えー、またまたあ」

凜がアハハと笑う。そのまま三人で、今回の小テストの振り返りをした。

昼休み、凜が購買に行っている間スマホをいじる。檜山くんは男子グループの中に混ざって食べていて、私が檜山くんと一緒に昼休みを過ごしたのは結局初日だけだった。

「あ」

ぼーっとスマホを見ていると、葵からメッセージが入る。メッセージを開くと、週末また家に来てほしい、と書かれていて、どうやら勉強会のお誘いのようだった。私もまた葵に会いたかったし、と日曜日に軽く揉めて気まずい母から逃げる理由をつけて、その誘いに乗った。

「お待たせー」

「おかえり。食べよ」

「うん！」

スマホを置いて、お弁当を開ける。揉めているのに、今朝いつものようにお弁当が置いてあった。私はまたそれが少し気まずかったが、置いていくのも当てつけのような気がして結局お弁当は持つてきていた。

「いただきますーす」

「いただきます」

帰ったらまた、揉めるのだろうか。きっとパート先で、パート仲間の、私の中学時代の同級生の母親なんかに愚痴をこぼしたりしているのだろう。私がため息をつきそうになったとき、凜はじっと私を覗き込むように見つめてきた。

「なんかあった？」

「うーん。お母さんとちょっとね、まだ進路で揉めてる」

「あー、決着ついてないんだ」

「まあ……」

実家から通える、母の母校でもある木崎大学に行つてほしい母と、地元から離れたところにある茅ヶ崎大学に行きたい私。父はどっちつかずの中立派で、まるで役に立たない空気がだ。

「大変だね」

「うーん……」

「なんていうか、やりたいこともないのに行くってどうなんだろうって」

「木崎大って教育学部ないんだっけ」

私が行きたい教育学部は、木崎大にはない。この辺りには大学も少ないため、教育学部

があるところでそれなりのレベルのところにしようと思うと、実家を出ざるを得ないのだ。母は女の子の一人暮らしは心配だとか、木崎大の方が偏差値が高いだとかでまるで譲る気がない。私としては母のエゴで人生を決めつけられるのが不服で、経済的な理由だとか、私の偏差値が絶望的に低いだとかが理由ならまだ納得できた。

「上手くいくといいよね」

心の底から私を心配してくれている凜がしゅんとした顔でそう言う。凜は進路についてかなり適当だったが、最近ようやく志望校を決めたと言っていた。

「あたしはそんなに、偏差値とかいる学校じゃないしあれだけど……。でも、なんか手伝えることあったら言ってよ！ おかーさんの説得とか！」

「あはは、ありがとう」

私はお弁当を食べ進めて、騒がしい昼休みをやり過ごした。

表札すら出ていない檜山家のチャイムを押して待つ。しばらくすると鍵が開いて、葵が顔を出した。

「おはよう」

「おはよう、入って」

「お邪魔します」

葵は嬉しそうに笑って私を中に入れる。今日はパジャマではなく、大きめのパーカーとスウェットを履いていた。

「お、穂波」

「おはよう、お邪魔します」

「はは、どーぞ」

檜山くんはどこかに出かけるらしく、鞆を持っている。檜山くんはすぐに、行ってくると言って出て行った。

「今日、茜くんもお勉強会なんだって」

「へえ……。先生役かな」

「多分ね。頼られたら断れないから。いつも自分のことは二の次だよ」

葵の口ぶりから、檜山くんはたまに損をするタイプなのだろうと分かる。私が持ってきた手土産を葵に渡すと、葵ははにかんでそれを受け取った。

「このケーキ屋さん、わたしも行ってみたいな」

「今度、行こうよ」

「二人で？」

葵の漆黒の瞳が私を捉える。その瞬間、床に縫い付けられたかのように動けなくなった。葵の瞳から外れることは許されないかのような錯覚に陥って、私は頷いた。

「ふ……二人で」

「嬉しい」

葵がふわりと微笑む。葵の小さな輪郭には、微笑むという行動がよく似合った。

「今日はわたしの部屋でお勉強しよう」

「いいの？」

「もちろん。椎奈なら、いいよ」

許された距離感に胸が高鳴る。葵の部屋に入ると、やっぱり窓が開いていた。金木犀の香りが前よりも濃く香ってくる。

「窓、閉めるね」

「うん」

部屋の中央にはローテーブルと参考書が置かれている。私はローテーブルの横に荷物を置かせてもらった。

「クッション、これ使って」

「ありがとう」

葵がベッドの上からクッションを取って渡してくれる。私はそれを床に置くと、そのまま座った。

「なんの教科からやろうか」

「英語にする」

今日は午前中から夜までみっちり勉強をする約束だ。時間はあるようでないという、いつかの安藤先生の言葉を借りて、私はある程度今日のスケジュールを決めてきていた。

「分かった。じゃあ、タイマーかけるね。一時間でいい？」

「うん、いいよ」

檜山くんが言うには、長い時間やり続けるより休憩を挟んだ方が集中できるらしい。今はいない先生たちを思い浮かべて、私たちは集中モードに入った。

集中と休憩を繰り返して、昼の時間になる。今日の昼食は、マンションのエントランス部分に入っているコンビニで調達済みだ。

「茜くんがね、作っておいてくれたんだ」

「すごいね……」

葵の部屋を出て、先週も昼食を食べたりビングに入る。葵は私に、前と同じ場所に座るように言って、キッチンに入っていた。

「お待たせ」

電子レンジの仕事が終わった音のすぐあとに葵が出てくる。葵が持ってきたお皿には、おにぎりや玉子焼き、赤いウインナーにミートボールなど、お弁当のラインナップが顔をそろえていた。

「いただきます」

「いただきます」

コンビニで買ってきたツナサンドの包みを破る。どこかで食べたことがあるような、なんの変哲もない味。

「ねえ」

「ん？」

「学校、楽しい？」

一瞬、どう答えるか言葉につまる。葵が外に出られない本当の事情を知らない分、下手なことを言っただけだと思っただけだ。

「教えて、椎奈。学校でなにしているの？」

「なにって……」

「どんな友達がいるの？」

そこに、初めて会った日の震えはない。葵はただ純粋に、私のことを知りたくて聞いてきているようだった。

「授業受けて、たまにテスト受けたり？ 部活はもう引退してるよ」

「部活、なにやってたの？」

「書道だよ」

「へえ、だから椎奈の字って綺麗なんだね」

「そうかな……」

そうだよ、と葵が肯定する。私は照れ隠しで、友達の話に話題を移した。

「友達は、凛っていう子がいて、すごい面白いんだけど」

「もしかして、秋田さん？」

「そう、その子。檜山くんから聞いたことある？」

「うん。数学頑張ってたって」

知らないところで有名人になっている凛について笑ってしまう。葵はいいなあとぼつりとこぼした。

「学校、気になる？」

「うん。一応ね、椎奈と茜くんと同じ高校、行けるの。籍はあって」

「えっ、そうだったの？」

葵が小さく頷く。そしてそのまま肩を下げて、申し訳なさそうに言った。

「二人の担任の……えっと、そう、安藤先生がね。補講課題を提出すれば、出席にカウントするって言って、すごく配慮してくれて」

「安藤先生が……？」

大欠伸をする、黒いジャージが皮膚みたいな担任を思い出す。あの人がそんな配慮をしていたなんて初めて知った。

「わたし、それに甘えてるの。茜くんにも代わりに、課題持って行ってもらって」

葵は苦しそうだった。誰かに気にかけてもらったり、助けてもらったりすることが申し訳なくて、でも現状から脱却する術がない。そのもどかしさが、真綿で首を締めるように少しずつ葵をむしばんでいく。

「だめなのは分かっているんだけど……、わたし」

「だめなんかじゃないよ」

反射的にそう言う。そしてすぐ、しまったと思った。まだ葵の事情を知らない私が、こんなことを簡単に言っているはずがない。

「……そうかな」

「うん」

引っ込みがつかなくなって、葵の言葉に頷く。私の罪悪感とは裏腹に、葵は安心したように笑った。

「椎奈がそうやって言ってくれると、ちょっと安心する」

「そっか。それなら、いいんだけど」

葵が玉子焼きを食べる。食べるのがゆっくりで少食らしい葵は、檜山くんがお弁当で食べるには小さすぎる、きつと葵のためだけに握られたおにぎりを手にとった。

「茜くん、なんて言ってた？」

「え？ なにを？」

葵の質問の意図が分からず、ぽかんとした顔をしてしまう。葵は何度か、ぱちりぱちりと瞬きをしてから、私と同じくらいぽかんとした。

「わたしが、外に出ない理由……」

「なんにも……」

檜山くんはむしろ、凛に嘘をついてまで隠そうとしていた。私には病気の療養のために、と言っていたが、それもきつと嘘で、核心的なことはなにも言っていない。葵は私の答えに安心したような、辛そうな、よく分からない顔をした。

「まだ言ってたかったんだ」

「う、うん。葵のこと、勝手に言いふらすのはよくないって思ったんじゃないかな」

葵がおにぎりを食べる手を止める。葵は何度か、自分になにかを言い聞かせるように頷くと、私を真っ直ぐ見つめた。

「わたしが外に出ない理由はね」

葵の声がわずかに震える。私がまだ言わなくていいと止める前に、葵はゆっくりと、糸のように細い声で言葉を続けた。

二

俺はこの世界に生まれたとき、同時に『兄ちゃん』になった。檜山茜には、枕詞として『兄』がつく。と、勝手に思っている。

「茜くん、おかあさん、いないよ」

「……うん。大丈夫、俺がなんとかやるよ」

母親が俺たちの前から忽然と、突然姿を消したのは、小学生になって半年ほど経った頃だった。前日、俺がガス漏れの臭いがすると言って、正体が金木犀だったことに俺と葵と母親の三人で大笑いしたばかりだった。だがその夜、父親とひどい喧嘩もしていた。俺た

ちがいくら母親のことを訴えても父親はさして気にする素振りもなく、俺の手を必死に握る葵を守ってやるのは俺しかないんだと思った。この世でたった一人の、『兄』檜山茜の『妹』檜山葵を、俺はずっと守っていくんだと、これまた勝手に覚悟を決めた。

「茜ー！ 今日、帰ったらサッカーしようぜー！」

「放課後はごめん、用あるんだよ」

「茜くん、もう帰る？」

「おー。帰ろう。先にスーパー寄ってからな」

できやしないのをどこかで分かっている、俺は母親のふりを続けた。葵は俺のそばを離れようとしなかったし、俺もそれだいたいと思っていた。俺たちはこれが正解の形で、元々一つだったのが、無理に二つに引き裂かれたんだと信じた。

「クラス、離れちゃったね」

中学に上がって、葵とはクラスが離れた。俺が知らない時間を葵は過ごしたし、葵が知らない時間を俺は過ごした。三年間、俺と葵はクラスが違った。今思えば、意図的にそう振り分けられていたのだろう。双子はクラスを離される、そんななんの根拠もない都市伝説じみた噂がまことしやかに囁かれていたのを、今も妙に覚えている。

「テスト、あんまりよくなかったの。茜くんは？」

葵はあまり要領がよくなかった。全てがゆっくりで、俺の二分の一のスピードで生きている。俺は葵に教えるためにひたすら勉強を頑張った。

「茜くんはすごいね」

「そんなことないって。葵もゆっくりやればちゃんとできるだろう」

葵の純粹で、真っ白な言葉が俺を走らせていた。高校も同じところを受験して、一緒に通った。

「また、クラス違うね」

「まあ、そういうもんなのかもな」

「檜山ー！ 部活見学始まるぞー！」

高校生になってからは、全員部活に入部することを義務付けられていたのもあって、陸上を始めた。陸上は俺を簡単に虜にして、葵といない時間がどんどん増えた。引き裂かれたはずの一つは、最初から引き裂かれてなんかいやしないない、二つだったように形を変え始めた。俺はもう、お互いに子どもじゃないだの、葵には葵の付き合いがあるだの、葵を遠ざけるようになった。

「茜くん……」

「ごめん、練習遅れるからもう行く！」

だから、葵の変化に気づけなかった。父親はやっぱり俺たちに無関心で、お金だけを置いていく他人と化していた。近所では、可哀想で健気な双子と冷徹な父親というストーリーが完成されていた。それもあってか、父親は近所付き合いが疎ましいようだった。三年生で葵が相当ないじめに遭って不登校になってから、父親はいいタイミングだと言うよ

うに引っ越しの準備を進めた。

「いきなり引っ越して！」

「このままも、葵によくない」

「でも」

もう少しで最後の大会だった。三年間、走っているときだけ、俺は俺のスピードで生きていられる気がしていた。チームメンバーと肩を抱き合って笑う、そんな青臭い青春だった、俺には手放しがたいものだった。

「茜。妹がいじめられていてもいいのか」

最後の、大会だった。

「……いや、わがまま言ってごめん。そうだよな、うん、葵の方が大変なんだし」

「お前がきちんと見ていればよかったんだ。あれは人付き合いが下手だし、黙っていればいいと思ってる。あの女にそっくりだ。生きる要領が悪いんだ。茜、甘やかしすぎだな」

俺は叫んで、怒鳴り散らしたくなった。あんたがもっと、もっと、俺たちを、もっと、母さんを、もっと！

「……準備進めるよ」

「早くな」

俺はふと、今まで俺が俺のために生きてきた時間は、何割あっただろうかと振り返った。母親が出て行った日から、俺は葵のために家事を覚えて、勉強をしていた。葵の純粋で綺麗なところを守りたくて、必死に繋いでいた手を放したくなかった。俺は父親の言葉で、大事に磨き上げてきた過去がみしりみしりと音を立てて、ガラスが飛び散るように簡単に砕け散っていったのを、頭のどこかで感じていた。だから、穂波がお疲れ様と言ってくれたとき、俺に不用意に踏み込まないように、傷つけないようにブレーキを探しながら話してくれたとき、秋田についた嘘を咎めずにいてくれたとき、本当に嬉しかった。受け入れられた気がした。散らばった過去を大事に拾い集めてくれた気がした。

「檜山？」

「……あつ、ごめんな、なんだった？」

「いや、手が止まってたからさあ」

「それ食わないならくれよ」

「食べる食べる！」

止まった俺の脚は、穂波のおかげで少しずつ動き出している。

止まりそうな呼吸をなんとか無理やり繰り返す。

「わたし、」

言わなくちゃと思うほど、喉がしまる。茜くんにごめんなさいを言いたいの、ずっと言えないままのように。

「葵」

椎奈がわたしを見ている。わたしを心配している、優しい目だ。茜くんが初めて椎奈の

話をしてくれたときのことを思い出す。話が合っていていいやつだと、久しぶりに見る心からの笑顔で言っていた。何気なく、会ってみたいとこぼしてしまった。茜くんは少し驚いた顔をして、すぐに会わせてくれた。

「わたしね」

分かっていて。わたしが会いたいと言えば、自分だけの人でいてほしい相手でも、わたしに会わせてくれてしまうことも。わたしのお願いを、全て叶えようとしてくれてしまうことも。茜くんはきつと、椎奈のことが好きで、わたしも同じようにこの人に惹かれてしまうことも。全部、分かっていて。今も、椎奈なら聞いてくれると分かっている、過去をさらけ出している。わたしはずつと、誰かの優しさに甘えて生きている。

「前の学校で、い、いじめられて、教室に閉じ込められて、物とか、全部、なくなっちゃって、裸足で、あ、歩いて帰って、そこ、撮られたりして、」

みっともないほど、声が震える。椎奈はわたしを見つめたまま動かない。

「ひ、ひ、人に会うのも、外に出るのも、こ、こ、こわ、こわくて、」

上手く発音ができなくなって初めて、わたしは泣いていることに気がついた。椎奈は何度か視線をさまよわせてから、自分の服の袖をぐいと伸ばしてわたしの涙を拭いた。

「ずっと、茜くんにも迷惑ばかりで、昔から、ず、ずっと、ごめんなさい、ごめんなさいっておも、思っ、いえなく、言えなくてっ」

もはや懺悔に近い告白を、椎奈はやっぱり、うん、うんと聞いてくれる。わたしは縋るように椎奈の手を頬にあてて、椎奈の体温を感じた。

「椎奈、わ、わたしは、茜くんがいなくて上手く友達も作れないの。わたし、主体性？自分？　そういうのがないから、イライラ、するんだって。い、いない方がいいんだって！」

「そんなことない！」

わたしの声よりずっと大きな声で椎奈が叫ぶ。椎奈は苦しそうにわたしの頬を撫でながら言った。

「そうやって、言われたの？　前の学校の人が、そうやって言ったの？」

わたしがゆっくり頷くと、椎奈はまるで自分のことのように辛そうな顔をする。穏やかに落ち着いた印象を持つ椎奈の中に眠る激情に触れて、わたしの心臓が大きく震えた。

「私は葵のことまだ全然知らないけど、でも、葵がそんなこと言われていいなんて思わないよ」

瞳を潤ませて、それでも感情に振り回されないように、余計なことを言っ、わたしを傷つけないようにする椎奈は、どこか茜くんに似ていると思った。

ぽろぽろこぼれ続ける葵の涙をなんとか止めようと必死になっていると、鍵を回す音がした。ただいまと言いながら扉を開けたのは檜山くんだった。

「一人体調悪くなったから早めに解散して……、えっ、葵なんで泣いて……」

「茜くん、わたし、」

葵の言葉の続きを檜山くんは瞬時に察したらしく、私を見つめて優しく、どこか申し訳なさそうに笑う。そして、葵の隣に座った。

「穂波、聞いてくれてありがとな」

「ううん、それは全然……。でも、葵にキツイこと思い出させちゃった」

「わたしが、椎奈に隠したくなかった。友達でいたいから……」

葵の言葉に、胸の奥の奥が苦しくなる。葵と私を順番に見つめて、檜山くんは目を伏せて言った。

「思ったとおり、仲良くなれそうでよかった」

檜山くんの笑顔はどこか物寂しくて、私はそれが引かなかった。

葵は私をほとんど毎週末、家に招くようになった。今日も私は葵に聞かれるのであろう学校の話を手土産に、檜山家……。葵の部屋に入り浸る。最初は生活感を感じられなかった少し不気味な部屋も、洗練された空間のように思えてきた。

「それで、凜が水道の蛇口勢いよく捻ったら思いっきり蛇口外しちゃって。たまたま見た安藤先生と本気で校内追いかけてさ」

「秋田さん関連の話って、本当に面白いね」

「凜は友達多いし、あと、校外でも人脈あるから、話題には困らないね」
会ってみたいな、と葵が呟く。私は何気なく、クローゼットの方に目を向けた。

「……一緒に、会いに行く？」

凜ならきつと、葵を傷つけるようなことは言わないはずだし、なにより檜山くんとも仲がいい。葵は大きく目を見開いて、私を見つめた。

「会いに行く、って？」

「えっと……あ、会いに来てもらった方がいっか」

迂闊だった、とすぐ言葉を訂正する。葵はしばらく黙ってから、消えてしまいそうな声で、行きたい、と言った。

「え、で、でも」

「行きたいの。椎奈と一緒に。まだ、ケーキ屋さんにも行けてないし」

葵の手が伸びてくる。私の手をきゅっと握って、葵は私のすぐ横に座った。そして、そのまま私の肩に頭を預けた。色素の薄い髪からふわりと金木犀の香りがする。私はそれに、胸の奥がとくとりと甘く高鳴ったのを感じた。

「じゃあ……、行こう」

「ほんと？ 一緒に？」

「うん。公園でも、駅でも、ケーキ屋さんでも……学校でも」

私が慎重にそう言うと、葵は不安げに、でもどこか嬉しそうに笑う。葵は立ち上がると、クローゼットを開けた。

「制服、あるの」

その一言で、葵の決意が分かる。私は頷くと、葵の横に並び立ち制服のリボンをそっと

撫でた。

「迎えに行くよ。檜山くんもいるから、いらなかもしれないけど……」

「ううん、椎奈にも来てほしい」

「分かった。いつにする？」

「月曜日……。弱気になる前に」

葵はそう言って小さく微笑む。そして私の腕にぎゅっと抱き着いた。

「入るぞー」

数回のノックのあと、檜山くんが顔を出す。葵はそっと私から離れると、檜山くんになあにと近寄った。

「そろそろ、穂波の門限だろ？」

「うわ、ほんとだ。ありがとう、檜山くん」

「いや、いいよ。随分仲良くなったみたいだし？」

いたずらっぽく笑う檜山くんは葵がうん、と頷く。そして、小さな声で檜山くんに言った。

「茜くん、わたし、月曜日学校行ってみる」

「え!？」

檜山くんがぎょっとする。葵はじつと檜山くんを見つめたまま、頑張りたい、と呟いた。

「……穂波のおかげ？」

「あ、いや……。凜に会ってみたって」

「秋田に？」

檜山くんが意外そうに言う。そして、葵のこを見つめ返して、分かったと頷いた。

母に朝食はいらない、お弁当もいらないと告げてお小言をくらう前に家を出る。そのまますぐ横の部屋の前に立つと、檜山くんに連絡を入れた。ほどなくして返信がきて、鍵は開いているから入ってほしい、とのことだった。

「お、お邪魔しまーす……」

だいぶ慣れたとは言え、朝という普段とは違う空気感から少し緊張する。檜山くんがリビングから顔を出し、私を呼んだ。

「ごめん、葵が出てこなくて」

「入っていい？」

頷いた檜山くんに代わって、葵の部屋の扉を開ける。そこには、ベッドの上でうずくまる葵がいた。

「葵」

「ごめん、椎奈、わたしやっぱり」

葵はきちんと着替えてはいるものの、ベッドに放り出されたハンガーにリボンだけが取り残されている。私は自分のリボンをほどくとベッドに座った。

「葵、こっち向いて」

葵がゆっくり身体を起こす。私は葵のブラウスの襟を立てた。

「お守りじゃないけど……」

うなじの方からリボンを通して、なるべく綺麗に結ぶ。葵の潤んだ瞳と、熱い皮膚が私の指先を緊張させた。のぼせそうなほどに、私の頭はグラグラとしている。このまま、葵を抱きしめたかった。

「このリボン、私のやつ」

「椎奈の？」

「うん。私が葵のリボンつけるよ。願掛けみたいな……」

葵の瞳がきらりと輝く。葵はハンガーからリボンを引っ張ると、私が葵にしたように私のブラウスにリボンを結んだ。

「葵、行ける？」

「……うん」

葵がベッドから爪先を降ろす。私は葵を支えようとして、すぐに手をひっこめた。葵が自分で立たないといけないと思ったからだ。

「穂波、葵」

「茜くん、お待たせ」

「いいけど……、大丈夫か？」

葵が頷く。檜山くんはなおも心配そうに葵を見ている。私は葵の左手を引いた。

「……頑張る」

私の手を握り返しながらか葵がそう言う。檜山くんの色素が薄い瞳が心配そうに揺らめいた。

「葵、あんま無理は」

葵が右手で首元のリボンを触る。リビングを出て、葵がもう一度言った。

「頑張る」

檜山くんがぱちりぱちりと瞬きをする。そして、こくりと頷いた。

「分かった」

葵のローファアを、檜山くんが靴箱から出す。少し爪先が削れたローファアを、葵は座ってからゆっくり履いた。

「茜くん」

葵が檜山くんに手を伸ばす。檜山くんは葵の手を引っ張って、玄関の扉の前に立たせた。

「椎奈」

葵が私の左手を握る。私が玄関の扉に手をかけたとき、葵の身体がこわばったのが伝わった。私は葵を引き寄せて、玄関の扉を開けた。

「わ、」

風が吹き込んで、私たちの髪を揺らす。葵は浅く息を吐くと、玄関から一步踏み出した。

「椎奈、茜くん、待って」

葵が必死についてくる。檜山くんは私たちの一步先に行って、たまに葵の声でこちらを振り返った。

「エレベーター、久々だな」

「ここ越してきて以来だもんな」

檜山くんがどこか嬉しそうに言う。エレベーターの扉が開いて、私たちはエントランスに出た。

「待って」

「……葵」

葵の脚が止まる。それとは対照的に、檜山くんの脚は止まらない。葵に合わせて止まった私は、葵を見て自分の首元のリボンを触った。

「行く？」

葵も同じように首元に手をやって、何度か深呼吸をした。

「行く……」

檜山くんを追いかけるように、エントランスを出る。私と檜山くんがアンチ同盟を組んだ、金木犀の街路樹が私たちを出迎えた。

「金木犀……」

葵がぼつりと呟く。葵の手が私からずりりと離れた。

「ねえ、椎奈」

「なに？」

葵がスカート翻しながら振り返る。そのとき朝の風が吹いて、金木犀の花が枝を離れた。葵の色素の薄い髪が、金木犀をいくつか纏う。私はそっと、無意識にそっと、葵の髪に手を伸ばした。

「わたし、金木犀って好きだな」

葵が柔らかくはにかむ。そのはにかみが、私にはこの世で一番美しいもののように思えて、返事をするのが一拍遅れた。

「……うん」

「いい香りだし、綺麗」

「そう、だね」

葵の髪に寄り添った金木犀を取る。まるで星を取ったようで、地面にくれてやるのが惜しかった。

学校まで、私と檜山くんが葵を挟んで歩く。葵はたまに周囲の笑い声に肩を強ばらせて、浅く息を吐きながらゆっくりと歩いた。普段よりも随分早く家を出てよかったな、と私はぼんやり思った。

「椎奈、檜山、おっはよー!」

車道の方から、聞き慣れた声がする。目線をやると、車の窓を開けて手を振る凜がいた。

「ろろんんありがとう、ここで降りるよ!」

どうやら運転席にいるのはミロクさんらしい。凜は跳ねるように降りてくると、私たちの方にやって来て、葵を視界に捉えた。

「……新しい友達?」

「俺の妹」

「妹? 初めまして、秋田凜です」

よろしく、と言って笑う凜に、葵がぱちりぱちりと瞬きをする。そして、おずおずと頭を下げた。

「檜山、葵です。えっと……その、よろしく……」

会いたがっていたのに、緊張している。凜は葵の緊張なんてお構いなしと言うように、いつものようにご機嫌なまま雑談をはじめた。

「ろろんんね、今日まで夜勤だったんだって! あ、ろろんんっていうのはね、あたしのお兄ちゃんの彼女なんだけど、すごいいい人! 夜勤明けなのに、駅まで走ってたあたしのこと見つけて送ってくれたの! 優しくない?」

「ろろんんすごいな。俺なら夜勤明けすぐ帰る」

「またまたあ。檜山もあたしが遅刻しそうになってたら送ってくれそうじゃん」

どうだかなあと檜山くんが軽快に笑う。凜は流れるように葵に視線をやって、葵にも分かるような話題を振った。

「安藤先生ってさ、うちの担任でしょ?」

「あ、う、うん」

「名前がね、龍之介なんだけど、あたしこっそりアンドリューって呼んでるんだよね。でも檜山も椎奈もこのあだ名使ってくれないから、葵ちゃん使ってよ」

「考案者が本人の前で使えよ」

檜山くんのツツコミに葵がクスクスと笑う。葵の笑顔を見て、凜は嬉しそうに笑った。

「葵ちゃんも同じクラスだといいな! 昼椎奈と食べる? あたしも一緒にいい?」

「あ、秋田さんがよければ」

「凜でいいよ!」

凜の明るさに、葵の口元に微笑みが戻る。私はそれを見てみると、嬉しいはずなのに、なんとなく胸の内側がピリリとした。

凜はあつという間に葵と仲良くなった。私と凜、私と葵だったのが、私と凜と葵になった。昼も三人でいることが当たり前になって、たまに檜山くんがこちらの様子を見ているのを自覚しながら、私たちは穏やかに過ごしていた。

「葵、もうここ慣れた?」

「うん、ある程度……。まだちょっと、緊張するけど」

葵は凜に、前の学校の話はしていない。凜は葵に必要以上のことを聞かないし、というか、聞くという選択肢がないらしく、葵はそれが心地いいようだった。

「椎奈とは家隣なんでしょ？」

「うん、偶然」

「いいなあ」

凜がそう言いながら机にべたりと突っ伏す。しばらくして、凜はそうだと言ってすぐ起き上がった。

「あたし、二月から一人暮らしする！」

「二月？」

突然の宣言に、私も葵もお昼ご飯を食べる手を止める。凜は胸を張って、私と葵に言った。

「結構都市部の方だから、泊まりに来ていいよ！ 部屋綺麗にしとくから！」

「え、もう決定なの？」

「すごいね、凜。一人暮らしなんて……」

「決定！ 引越しもお兄ちゃんところろんが手伝ってくれるんだ」

嬉しそうに笑う凜とは対照的に、私の進路は停滞中だ。母とは顔を合わせてもあまり会話もないし、最近はお弁当はいらないと言って菓子パン生活を送っている。私は今日も母をスルーして生活することに、辟易してきていた。

「二人はどう？」

「私は相変わらずかな」

「……わたしも、まだあんまり決まっていかな」

「そっかあ。あたし、部屋探しなら得意だから任せてね！」

凜のドヤ顔に私も葵もつい笑ってしまう。私は菓子パンをお腹に詰め込むと、茅ヶ崎大の赤本を机の中から取り出した。

私の進路について先に我慢の限界を迎えたのは、母の方だった。私がスルーし続けた結果、家族会議という名の私の処刑が始まってしまった。

「ねえ、椎奈。いい加減にしてよ、どうしてお母さんの気持ち分かってくれないのよ？」

「……」

俯いて、決して声を荒らげるわけでもない母の怒りを受け流す。母は進路希望のプリントを机に置いて、私にペンを握らせた。

「危ないじゃない、わざわざ遠いところに行かなくなった方がいいじゃない、木崎大なら就職に有利だし」

「お母さん」

「どうしても茅ヶ崎大じゃなきゃだめ？」

母のため息混じりの声に、私もため息が出そうになる。どうして分かってくれないのと

叫び出したくても、叫べない。私がペンを置いたとき、父が言葉を発した。

「好きにしたらいいよ」

母が驚いたように父を見つめる。私も同じくらい驚いて父を見つめた。

「茅ヶ崎大に行くなら行けばいい」

父が私の顔を伺っているのが分かる。檜山くんみたいに、こちらを傷つけないために探っているのではない。ただ、自分が恨まれたくないから私の味方をしたのだと思った。

「……しばらくほっといて、お母さんともお父さんとも話したくない」

お母さんへの苛立ちと、お父さんへの失望感。味方をしてくれたはずなのに、利己的部分が見えたのが嫌だった。そんな子どもじみた理由で、私は家を飛び出した。二人がいるところにいたくなかった。檜山家の前で足を止めて、すぐにエレベーターに向かう。少し頭を冷やすために、私はマンションを出た。

歩いていると、進路のこと以外にも葵のことを思い出す。最近凜と仲良いな、とか、私より凜というときの方が楽しそうだな、とか。気が落ち込んでいるからなのか、私の気持ちにはどんどん沈んでいった。

「……まぶし、」

対向車線の方から車がやって来て、近くに止まる。ヘッドライトの眩しさに目を細めたとき、車の窓が開いた。

「こんな時間になにしてるの？ 凜ちゃんの友達よね？」

車の中から知らない女性に声をかけられ、思わず身構える。運転席の方のドアが開いて、声の主である女性が出てきた。

「私ね、ミロク。弥勒美月。凜ちゃんはろろんって呼んでるよ」

「……あ！」

女性の正体が記憶の中で繋がる。身長が随分高い、綺麗な女性だった。

「高校生がこんな時間になにしてるの？」

こんな時間、と言われてスマホを確認すると、二十二時半を回ったところだった。

「えっと……」

「家出？」

「……」

結果としてそうなってしまうっている状況に、頷くしかできない。弥勒さんはやるねえと言って、運転席に戻った。

「乗って乗って。女子高生一人じゃ危ないから」

「……でも」

「凜ちゃんに連絡しときな、一緒にいるって」

「はい……」

言われるがまま、凜に今弥勒さんということを伝える。弥勒さんは車を発進させると、前を向いたまま私に聞いた。

「悩み事？ 親と喧嘩しちゃった？」

「進路のことで、ちょっと……喧嘩っていうか……」

「あー、分かり合えないやつだね」

弥勒さんが分かるなあと行って笑う。私は弥勒さんの相槌に、私だけじゃないんだと安心した。

「一個不安なことがあると、友達のこととかも色々考えちゃったりもして」

「友達のこと？」

弥勒さんがハンドルを右に回しながら聞き返してくる。私は頷くと、凜と葵ということば伏せて話すことにした。私のことを知らない人の方が、話しやすかった。

「友達同士が仲良くなるのは嬉しいんですけど……、なんか、独占欲……みたいな、ちょっとモヤってしちゃって」

「なるほどねえ」

弥勒さんは相槌を打つと、唐突に言った。

「好きなの？ その子のこと」

「え？」

思わず弥勒さんを見る。弥勒さんはなんでもない顔で運転していた。

「好きって……、それは、友達としては……」

「ああ、違う違う。恋人になりたいの？」

「えっと……」

弥勒さんはあけすけに、恥じらうことでも気にすることでもないと言うように言葉を続けた。

「友達が友達と仲良くしててモヤるって、それはどっちかに特別な気持ちを持つてるからじゃないかって、ろんろん思うわけ」

お茶目さを感じる口調で弥勒さんがそう言う。弥勒さんは目線だけを私に寄越して、近くに出てきたカフェに車を入れた。

「こんな時間に女子高生連れ回すの怖いし、さすがにね。迎え……、親御さんは嫌なんだっけ、自宅聞いても平気？」

「は、はい！ すみません」

弥勒さんはドライブスルーでホットココアを二つ買くと、一つを私に手渡す。私がお金を払うと言うと、弥勒さんは一瞬ぼかんとしてからケラケラ笑った。

「凜ちゃん遠慮しないから忘れてたなあ、女子高生ってこうだった。いいよ、大人にカッコイイことさせといて」

凜があつという間に懷いたのも分かる。私は弥勒さんに言われるがまま、お言葉に甘えることにした。

「家この辺か。金木犀ロードだなあー」

「あはは」

弥勒さんがマンションの前に車を停める。弥勒さんはシートベルトを外す私に、静かな声で言った。

「受験のことは私にはどうにもできないけどさ。友達のことね。友達のこと、大事に思っていて、それが恋人になりたいっていう……そういう形の気持ちなら、落ち着いてからでいいから言葉にした方がいいよ。後悔するから」

「後悔……」

私の中で、葵への気持ちが始まる。弥勒さんは私を見て、ニヤリと笑った。

「ま、言う後悔もあるけどね。ろんろんは若人を応援しておるよ。それじゃ、またね」

「ありがとうございました！」

車を降りて頭を下げる。弥勒さんはすぐに去って行って、私は一人エントランスを潜った。

「穂波？」

エントランスの一階部分にあるコンビニから、檜山くんが出てくる。檜山くんはココアが入っているカップを片手に持った私をまじまじと見つめて、心配そうに眉を下げた。

「こんな時間までなにしてたんだよ？」

「ちょっと、散歩」

「バカ、危ないだろ。今度からは俺呼んでよ、一緒に行くし」

檜山くんの優しさにじわりと心が温かくなる。檜山くんはエレベーターを待っている間にもう一度口を開いた。

「……あのさ、マジで。社交辞令とかじゃなくて、これからは本当に呼んでくれよ」

「う、うん」

「心配なんだよ」

檜山くんの目が、いつもの無邪気さを持っていない。葵に向ける目とも、凛に向ける目とも違う。知らない目が私を見ている。しかし檜山くんはすぐにいつもの顔に戻って、私にコンビニの袋を見せた。

「葵がさ、アイス食いたって。この時間から！」

「それでおつかい？」

「パシリな」

あはは、と笑う。私はいつも通りの檜山くんは無性に安心した。檜山くんとは部屋の前で別れて、私はなるべく物音を立てずに中に入った。リビングの電気はついていて、テレビの音もする。私が洗面所を開けると、ちょうど父が歯磨きをしているところだった。

「……椎奈」

「……」

黙ったままの私に、父が気まずそうに言葉を止める。父はうがいをする、しばらく意味もなく鏡を見てから、私にまた声をかけた。

「行きたいところに行ったらいいよ」

「急になに？」

刺々しい返事しかできない。学校での私はこんな顔も、こんなことも言わないだろう。父は私からの棘に怯みながらも、テレビの音に隠れるような小さな声で続けた。

「お父さんな、行きたい大学行かせてもらえなかったんだよ」

「……」

「お母さんのこと、気にしないでいいよ。金出すのはお父さんだから」

私は黙って頷くと、手を洗ってうがいをして、一息を吐いた。

「おやすみ」

「ああ、おやすみ」

私はリビングに入ると進路希望のプリントに茅ヶ崎大学教育学部と書いて、部屋に持って戻った。

私が安藤先生に茅ヶ崎大学を志望することについて突っ込まれたのは、翌日プリントを提出してからすぐの面談のことだった。

「茅ヶ崎大学ね、まあ、行けるとは思うよ。にしてもなんでまた教育学部？ 穂波は最近成績上がってるし法学部とかでも受かると思うけど」

「えっと……」

人知れず葵を気にかけていた安藤先生が、全く分からないと言うような顔をする。安藤先生は聞いてきたくせに、まあいいかとすぐ話を終わらせた。

「一般なら志望動機とか聞かれないしな。給料安定してるとかそういう理由でもこっちは構わんし。ま、面談で親御さんの説得はこっちがするから」

はい次の人呼んできて、とあっさり帰される。私が言われたとおり次の生徒を呼ぶと、すぐに凜と葵が二人で私の席までやって来た。私がいらない間に二人でなにを話していたのか、それが気になって仕方ない。弥勒さんの、どっちかに特別な気持ちを持ってるという言葉が反芻される。葵は心配そうな顔で私に聞いた。

「どうだった？」

「特にだよ。行けるだろうって」

「ははーっさすが！ さすが椎奈だよ」

「うふ、そうだね」

二人の仲が良さそうなやり取りが、心の下の方に蓄積していく。私がかかわらないでよと曖昧に笑うと、後ろから檜山くんが声をかけてきた。

「俺と葵は二人暮らし決定」

ピースサインをしながら檜山くんがそう言う。葵も嬉しそうに微笑んで言った。

「泊まりに来て」

「俺いるのに？」

双子のテンポのよさに笑いながら、行こうかなと答える。その直後、檜山くんは男子グループに呼ばれて去っていった。

穂波椎奈という人間を好きになったのは、こっちに引越してきてからすぐだった。穂波からの気遣いに気づいたり、笑った顔も可愛いなと思ったらあつという間だった。特別な出来事がたくさんあったわけではなくても、つい目で追うようになって、苦いものになっていた金木犀の香りの思い出が、少しずつ楽しくて明るいものになっていった。

「じゃあ希望の大学行けそうなんだな」

「うん」

放課後、葵が安藤先生……アンドリュース先生との面談が終わるまで二人で待つ。教室で赤本を広げながら、俺たちは二人でぼつぼつ会話をした。もう受験までラストスパークで、俺と葵は少しずつ引越しの用意も進めている。

「よかったな」

「うん、なんとかね。あとは受かるだけ」

聞くところによると、進路のことで母親と少し揉めたりもしていたらしい。そんな素振りにはちっとも見せてくれなかったことに寂しさを覚えつつ、夕日に照らされた穂波の顔をじっと見つめた。

「え、なに？」

「いやー？」

この関係を壊したくない。俺が弱気になった瞬間、穂波がぽつりと言った。

「檜山くんって、恋人いたことある？」

「……なんで」

体温が上がる。穂波の目は伏せられていて、なにを考えているのかよく分からない。俺は慎重に、一回だけいたと答えた。

「どんな感じだった？ 他の人と仲良くしてたら、やっぱり嫌だった？」

ああ、と思った。穂波には今、好きな人がいるのだ。おそらく、俺ではない誰か。相手が俺なら、きつとこんな風に聞いてきたりはしないだろう。妙に冷静な自分を押さえつけながら、俺はうーんと考えるふりをした。

「まあ、ちょっとはな」

「友達だった？ その人」

「最初は」

「そっかあー」

穂波が納得したように言ってから身体をぐいーっと伸ばす。今は金木犀も散りきって、寂しい枝葉しか残っていないあの木がまた花をつけた頃に、一緒に笑い合うことももうないのだろう。俺が今、この言葉を言ったら、高校を卒業したあと、もうあの道を一緒に歩くことはきつとなくなる。

「好きな人、いるんだな」

「……うん」

きつと、穂波に好かれる人は幸せだ。俺は穂波が好きだから、心の底からそいつが妬ま

しくて、羨ましくて、そいつから穂波を奪い取ってしまいたかった。

「誰？　とか、聞いていい？」

「……」

穂波がぐっと唇を固く結ぶ。しまった、と思った。ずっと保ってきた均衡を崩してしまう。俺が冗談、と言うより前に、穂波ははっきりと言った。

「葵。……葵だよ」

「……葵？」

頭がものすごく重いもので殴られたような衝撃が、俺を襲う。俺はなんて返すか迷うより先に、葵にとてつもない嫉妬の感情を抱いた。妬ましい、羨ましい、その立場が欲しい。兄として、妹に向けるべき感情ではないのは本能で分かっていた。それでもなお、俺はそれを止められなかった。

「なんで、」

なんで、俺じゃないんだ。そう言いたかった。でも、目の前にいる穂波があまりにも真剣で、俺はすぐに言葉を探し直した。

「……いつから？」

「気づいたのは最近、かな。でももしかしたら、会った日から好きだったのかも」

「一目惚れだ」

そうかも、と頷く穂波がとてつもなく眩しくて、俺はもうなにも言えなくなった。汚い言葉をぶつけたところで、穂波は絶対に俺の元へは来てくれないと、その眩しさを見ていて分かってしまったからだ。

「あのさ」

「ん？」

穂波が顔を上げる。俺はきつと、明日も明後日もその先もずっと、葵に嫉妬するんだろう。そしてこの醜い嫉妬を葵にひた隠しにして、これからも生きていく。葵の前では、俺はいい兄ちゃんんでいたかった。葵の前で完璧を崩したら、俺の今までが父親からだけでなく、俺自身からも否定されてしまう。俺はそれがたまらなく嫌だった。やっぱり会わせなければよかったと、奥底で考える自分を今すぐ殺さなくてはならないと、そうしなければ俺は余計なことを言ってしまうそうだった。

「受験終わったら、また話そう」

「うん」

脈絡のない俺の言葉に、穂波が不思議そうな顔をしながらも頷く。俺がそんな穂波に笑ったとき、葵から面談が終わったと連絡が入った。

「行くか」

「そうだね」

二人で歩く廊下は長いようで短くて、俺は今たまらなくそれが惜しい。穂波を見つけてとけるように笑った葵が見えて、それに同じような笑顔になった穂波を見て、俺は俺の中

の恋心が目を閉じたのを感じた。

受験会場の大学まで父が黙って車を出してくれる。受験前ギリギリまで復習をしていた私にとって、その無言の申し出はありがたかった。今日この受験が終わって、結果まで出たら、私は次のことを考えなくてはならない。一度しまっておいた、葵への気持ちを考えるのだ。

「着いたよ」

「ありがとう」

車を降りる。父は頑張れ、と言って停めるスペースを探す他の人のために、指定の駐車場からすぐに車を出した。

「……」

茅ヶ崎大学のキャンパスに足を踏み入れる。オープンキャンパスで何度か訪れたことがあるが、そのときとは違う緊張感を纏っていた。これなら、檜山家の方が緊張しないなど私は一人で少し笑った。受験直前まで、母は渋っていた。どうしても気は変わらないの何度か聞かれた。私はそれに頷いて、父の援護射撃を受けて無事、受験への切符を手にしたのだ。きつと、母とはしばらくギクシヤクするだろう。でも、それでよかった。ここに受ければ一人暮らしになるし、凜經由で連絡先を交換した弥勒さんには、時が解決してくれると言われた。今はとにかく集中しておきたくて、私はその言葉を胸に母のことを一旦忘れることにした。

三

他の受験生たちの群れに紛れて、受験後の解放感を味わいながら歩く。まさかわたしは、大学まで無事に受験できるとは思っていなかった。茜くんとは違う大学だけど、受ければお互いの中間地点で部屋を借りる。父親の機嫌を気にして、茜くんが几帳面に部屋を整えることも、しなくてよくなる。

「……あ」

スマホの電源を入れると、茜くんと椎奈、それから凜からもメッセージが入っている。茜くんとは受験後に待ち合わせて帰る約束をしていたから、そこに着いたという連絡。椎奈からはお互い頑張ろうねの連絡。凜からは応援してるよの連絡。私は順番に返信して、茜くんは今から向かうと送った。

「葵」

「茜くん、お待たせ」

「いいよ。どうだった？」

「できたと思う」

茜くんとぼつぼつ話しながら歩く。茜くんはわたしの話をうんうんと聞いて、歩く速度を合わせてくれながら笑った。

「よかったな、葵。こっち来て正解だった」

「……うん」

わたしにとっては、正解だった。茜くんにとっては、分からない。茜くんは、わたしのせいで最後の部活の大会に出られなかった。部屋で一人泣いていたのを、わたしは知ってしまった。そして、わたしはそんな茜くんになにも言えないままだった。

「茜くん、あのね」

「ん？」

優しいお兄ちゃんだ。わたしの前で、自分の感情を押し出すことがない。母親が出て行った日から、ずっとお兄ちゃんとお母さん役をやってくれている。そしてこれから先もずっと、わたしの前でお兄ちゃんの檜山茜でいるのだろう。

「あのね」

上手く息が吸えなくなる。椎奈にもらった、制服のリボンに触れる。わたしはそろそろ、茜くんにきちんと謝って、きちんとありがとうを言わなくてはならない。優しい、自分の気持ちを飼い慣らす茜くんの時間を返さなくてはならない。これから先二人で暮らすのに、わたしがその優しさに守られて生きるのはだめだと思った。

「葵？」

「今までずっと、ごめんね」

「……なにが？」

「わたしのために、ずっと時間を使ってくれて」

茜くんがうろたえているのが分かる。茜くんはそんなこと、とか、なにも、とか、口の中で何度か言葉を悩ませた。わたしはううんと言って、言葉が続けた。

「椎奈に会わせてくれてありがとう。こうやってまた、外に出て学校に行けるようになるって、思ってたかった。わたしは茜くんの時間を奪ったのに、時間をくれてありがとう」

「奪ったって、……俺はそんなふうに思っていないよ。葵と穂波を会わせただって、最後は俺の意思だよ。葵に、友達でできればいいって思ったから」

茜くんの、少し灰色っぽいわたしと違う目がわたしを見ている。茜くんの目はほんの少し、涙で濡れていた。

「ごめんね、茜くん。もっと早く言わなくちゃいけなかったのに」

「言えなかったことくらい、分かってるよ。言おうとしてたことも。俺さ、葵が穂波に前の学校のこと話してたの、嬉しかったんだ」

茜くんからの無償の愛が、この世界で一番あたたいものだ。わたしは知っている。わたしもそれに同じだけ、返していこうと思った。これからはもう、部屋に閉じこもるだけのわたしではないのだから。

「わたしも、椎奈と話せてよかった。あのね、茜くん。わたし、椎奈のこと好きだよ」

「知ってる。俺も好きだったし」

茜くんと目が合う。一瞬の沈黙のあと、茜くんはケラケラと笑った。

「俺は失恋決定してるから。今度潔く振られてくる。俺のためにさ」

茜くんが振られるなら、他にどんな人が椎奈の隣に立てるのだろう。わたしが驚いた顔をしたのを見て、茜くんは優しくお兄ちゃんの顔で笑った。

「穂波はさ、どんな相手からだってちゃんと受け止めてくれるよ」

「……そうだね。傷つけないように、頑張ってくれるし」

そのとき、凜から連絡が入る。みんな受験が終わったなら、お疲れ会をしようとのことだった。

「秋田ってほんと……コミュ強だよなあー」

「うん。凜って行動力もあるし、面白いしね」

凜が送ってきた店に、行くねと返して二人で歩く。椎奈からもすぐ行くと返信がきて、わたしたちは歩きながら凜や椎奈のことを話した。

四

真剣な顔で、卒業式の花を胸元につけた檜山くんが私を見下ろしている。受験の結果も出て、私たちは晴れて全員が希望する大学に行けることになった。私は今日、葵に気持ちを伝える。……と、一人きりの教室で意気込んでいたところ、檜山くんがやって来て声をかけられた。式自体は終わって、今は中庭で卒業生たちのお別れ写真撮影が始まっている。さっきまで、檜山くんはそっちにいたはずだ。

「穂波」

「う、うん」

「……あのさ。この前好きな人がいるって言ってただろ。それで、それが俺じゃないって分かってる上で言うよ」

檜山くんの色素の薄い瞳が揺れる。私は檜山くんから目が離せなかった。

「好きだった。穂波のこと。気遣いがちな優しいところとか、笑った顔とか。あと、金木犀嫌いなところとか」

檜山くんが最後は冗談めかして言う。私もそれについて、笑った。

「こっちに来ることになって、最初は納得いかないことも多くてさ。でも穂波に会って、来てよかったかもな、って思ったんだ。単純だろ？」

「えっと……私はそこまで檜山くんになにかできたわけじゃないと思うんだけど……むしろ、してもらってばかりだったし……」

私の言葉に、檜山くんが首をふる。そして、卒業証書が入った筒を机に置いた。

「なにも聞かずに、言葉を選んで、秘密は秘密のままにしてくれてさ。俺はそれだけでよかったんだよ。俺が大事にしてきたものを、一緒に大事にしてくれたって、勝手に思ってたから」

「檜山くん」

「失恋決定してるから、ちゃんと聞いたかっただけ。じゃないと、友達でもいられないだろう？」

檜山くんがそう言うてはにかむ。そのはにかみはどこか寂しくて、でも清々しいような、そんなはにかみだった。

「ほら、葵の方行ってこいよ。さっき探してた」

「えっ、でも」

「なんだよー、勝手に振られに来たんだから感傷に浸らせろー」

檜山くんがいたずらに笑ってそう言う。私を無理やり教室から追い出すと、また帰りなと言葉を残して教室の扉を閉めた。

「椎奈」

階段を登ってきた葵が、私を見つける。私は葵に駆け寄ると、階段の踊り場まで葵を連れて駆け下りた。

「どうしたの？」

葵が不思議そうな顔をしている。葵の首に揺れるリボンを見つめて、私は一思いに言ううと思った。檜山くんが私にそうしたように。

「葵、私は葵のこと」

葵が私の口に手を当てて、その先を言わせてくれない。私の心臓がひやりと冷たくなつたとき、葵が小さな声で言った。

「好き。椎奈のこと」

椎奈、と私の名前を呼ぶ葵の声に、初めて出会ったときのか細さはもうない。葵は私のリボンに触れると、うっとりするような顔ではにかんだ。

「同じ気持ち？」

その言葉に、こくりと頷くことしかできない。葵は私の手を取って、私を引き寄せた。いつか、私が玄関でそうしたように。

「嬉しい。あのね、ずっと、この距離がいいなって思ってたの」

葵がそっと私の唇を指先で撫でる。しかしそのとき、スマホがメッセージを受信した。

「……行こう。凜が写真撮りたいって泣きながら言ってたよ」

「……うん。待たせたら悪いよね」

号泣しながらみんなと写真を撮っている凜の姿が容易に浮かぶ。私は葵の手を握り返すと、一緒に中庭に行った。

「椎奈、葵ー！」

私たちを見つけるなり、凜が飛び込んでくる。自由登校期間になってから、一足先に引越した凜にはほとんど会えていなかった。受験後のお疲れ会以来の再会だ。

「卒業してもさ、遊ぼうね！ 絶対！」

「うふ、うん」

「会えない距離じゃないし、集まろう」

涙でぐちゃぐちゃな凜を見てみると、なんだかおかしくて笑ってしまう。写真を一枚撮ってから、凜が思い出したように後ろを振り返った。

「今日ろろん来てよ」

「弥勒さんが？」

「うん。あっちにいる」

言われるがまま視線を移すと、弥勒さんが小さく手を振ってくれる。私はそれに手を振り返して、葵と繋いだ手を見せた。弥勒さんはそれを見て、うんうんと頷いてから自分の左手を見せてくれた。

「……え、弥勒さん、お兄さんと結婚するの？」

「そう！ やっとプロポーズしたんだって！」

「素敵。正式に凜のお姉さんになるんだね」

凜が嬉しそうにそうなんだよ、と言う。私が弥勒さんの方に行こうとすると、弥勒さんは手でそれを制した。

「いい人だね」

「うん、ろろんはカッコイイ人！」

安藤先生が親たちと挨拶をしているのが見える。安藤先生には流された教育学部に行きたい理由は、小学生、中学生の頃漠然と、誰かになにかを教えて、導く仕事がかっこいいと思ったから。安藤先生に憧れた……わけではないが、人知れず葵に気を配っていたところは、尊敬する。私もそうなれたらいいと、今までの適当な安藤先生ではなくて、先駆者としての安藤先生を見つめた。

「ん？ なんだジロジロ見て」

「えー、先生がスーツ着てるの変な感じ」

凜がそう言ってあははと笑う。安藤先生の目元は少し赤くて、この人でも泣くんだなあと、少し意外に思った。

「秋田、お前一人暮らし大丈夫か？」

「大丈夫ですけど！」

先生の言葉はからかっているようで、教え子を心配して、けれど新たな人生へと送り出すための準備なのだと分かった。

「ま、気をつけて暮らせよ。穂波も檜山も、困ったらここに帰って来たっていいんだから」

「先生そういうこと言えるんだ……」

「秋田、お前やっぱり留年するか？」

大欠伸と黒いジャージ、寝ぐせの印象が強い先生からの言葉に、なんだか少し涙腺が熱くなる。私たちは涙声になりながら頷くと、ちょうどクラスの集合写真に呼ばれた。

檜山さんと葵と三人で歩いて帰る。卒業式に来てくれた父は母を連れて、車で先に帰ると言って帰ってしまった。

「……」

なんとなく、無言の時間が過ぎる。沈黙を破ったのは、檜山くんだった。

「俺に遠慮して黙ってる？」

「えっ」

「いや……そういうわけじゃ」

やれやれ、と檜山くんが笑う。檜山くんにはなんでもお見通しだった。

「あのなあ、俺はもう潔く友達なんだから、いい報告くらい聞かせてくれよ。それとも穂波も葵も振られた？」

葵と目が合う。葵はううんと言ってから、私の手を握った。

「付き合ってる」

「ほほう」

「付き合ってます……」

檜山くんが、私たちのために明るく振舞ってくれていると考えるのは傲慢だろう。檜山くんはもう、本当に潔く恋心と決別したのだ。

「じゃあ、俺は義兄ちゃんになるんだな」

「もう、気が早いよ、茜くん」

葵の言葉にそうかなと笑う檜山くんが、枝葉しかない金木犀を眺める。そして、私に言った。

「葵のこと、頼むな。うちにも遊びに来いよ」

「うん。二人もね」

マンションのエントランスを潜る。エレベーターに乗って、私たちはそれぞれの部屋の前に立った。

玄関を開けると、母が立っていた。母は私をじっと見て、吐き捨てるように言った。

「お隣さんと仲良いのね。何回かお母さん、お隣のお兄さんの方と会ったけど、椎奈なにも教えてくれなかったじゃない」

「……」

母の中で謎の檜山家はまだブームが去っていないらしい。私が呆れたように息を吐くと、母は苛立ったような声で言った。

「妹の方とはあんなにくっついて……お母さん、恥ずかしかった」

「付き合ってるからね」

反射的にそう返す。母は目を見開いて私を見た。

「私とあの子、付き合ってるの」

「椎奈」

父がリビングから顔を出す。母は現実を受け止められないと言うように、その場から動かなかった。

「一人暮らしするなら、いくつかお父さんの服、持って行きなさい。洗濯物を干すとき、

女の子の一人暮らしって分かって危ないから」

うん、と頷く。父は私と葵のことはなにも聞かずに、私に安全な一人暮らしをさせるため、あれこれ渡してきた。

「檜山さんとも、仲良くな」

「うん」

たったそれだけで、明後日家を出る私に父はそれ以上私と葵の関係になにも言わなかった。オートロックでも気をつけろ、夜道はイヤホンをしないように。なにかあったらすぐに連絡するように。私と葵のことを聞く代わりに翌日も、私の安全のことを何度も何度も口にした。

五

「それじゃあ……行ってきます」

「気をつけて」

「椎奈。またすぐ、帰ってきなさい。お母さん、認めたわけじゃないのよ。大学のことは先生に押し切られて、お隣さんのことだってね、」

出発の日も玄関が半開きのままで、母は最後まで私に言い続けた。父は母を咎めると、好きなときに帰って来ればいいよと言って、玄関を閉めた。

「椎奈」

「葵、檜山くん」

葵の荷物をいくつか檜山くんが持っている。引越するタイミングは、三人で合わせた。葵は私の家をちらりと見て、静かに言った。

「ちゃんと椎奈のお母さんとも話す。ずっとこのままは、嫌」

「そうだね。私も葵のお父さんとちゃんと話すよ」

マンションを出て、まだ花をつけるには程遠い金木犀を見ながら歩く。葵は、私との関係をお父さんに散々言われて叱責されたとき、檜山くんがそれ以上の剣幕で怒った話をしてくれた。

「檜山くんが……怒る……？」

「ね、想像つかないでしょう？　すごかったの、今まで無関心だったくせに、父親面するな！　って」

「葵……恥ずかしいからいいだろ、その話は……」

「嬉しかったの、わたしたちのために怒ってくれたの。茜くん、怒るの下手なのに」

檜山くんがそわそわと視線をうろつかせている。葵はうふふと笑って、檜山くんは照れくさそうに金木犀に視線を注いだ。

六

一人暮らしの家の近くには、金木犀がない。秋になってもガス漏れの臭いがすることはなし、あのオレンジの花は落ちていない。私はそれがなぜか、少し寂しく思えた。

「椎奈！」

駅で待ち合わせて、葵と檜山くんが暮らす家へと向かう。少し歩いていると、ガス漏れの臭いが漂ってきた。

「……あ」

金木犀の花が、足元に転がってくる。葵は私の手を取って、懐かしいねと言った。

「初めて一緒に学校行った日も、金木犀綺麗だったよね」

「……そうだったね」

「でも知らなかった。茜くんも、椎奈も金木犀嫌いだったなんて。この前聞いてびっくりしたんだよ」

少し拗ねたように葵が言う。私はそれについて笑ってしまった。

「今は結構好きだよ」

「本当かな」

「本当」

葵が私の手を引いて、私より一歩前に出る。そして、私を振り返りながらはにかんだ。

橙色の星が葵の髪につく。私はその星をそと取って、葵の色素が薄い髪を、そのまま柔く撫でた。